
第二十一話

下野国司出奔事

『前太平記』上 卷第三 六十一頁から六十三頁より

国香が討たれてから、諸国の軍勢が我も我もと走って（幕下に）加わったくらいで、将門はいっそう大軍勢になって、道すがらで一日中留まって、同月十八日、下野国の国府に到着したのだった。国中の人たちは上を下へと狼狽して取り乱し、ああ災いが、自身の頭上にやってきたと泣き叫び、私財や道具を持ち運び、老人や子供が道々に行き迷っている様は、楚の項羽が秦を攻め、潼関に入った事例（壺）に違わず、当国の国司はこのことを聞いて、どうしようかと慌てふためく。

このようだった状況で、十九日の暮れ程に、勅使下向とざわめいた。国司は、「それでは東国の反乱のことが（朝廷の）お耳に入り、当国に官符（弍）を頂戴し、（賊を）追討せよとの勅使であろう」と、すぐに手を洗い、口をすすぎ、烏帽子・直垂をもってこいと騒いだ。勅使はすぐに国司の邸宅に入られる。その出立ちは皆普通とは異なった様子の顔つきである。上官と思しき人は衣冠の下に腹巻き（参）を身につけ、客殿の上座に座り、色々と鎧を身につけている武者二百騎ほどが、庭に並ぶ。事態を異様に思いながら、国司は出て行ってこの人たちにお目にかかる。その時、例の上官か申し上げたことは、「そもそも平将門親王はご決意なさ

「抑今度平親王、 思し召し立ち給ふ事有って

ることがあって、ご進軍のところに、国々の兵が呼んでもいないのに駆け集まっ

御進発の処に、 国々兵招かざるに馳せ集まって、

て、その軍勢は雲や霞のよう（に集まってきている）だ。あちこちの村人たちに至

其勢雲霞の如し。 在々所々の郷民等に至るまで、

るまで、食糧を用意してその労をねぎらうようにして、皆親王の兵を迎えている。

簞食壺漿して 皆親王の師を迎ふ。

すでに昨日のうちに、当国の国府に（将門の軍勢が）ご到着になるところに、一人

既に昨日、 当国の府に著御成るの処に、 独り

国司が今になるまでの不参戦は、非常にご不審の心が晴れない心境である。もし違

国司今に及ぶまでの不参、 甚だ御不審晴れざるの処なり。 如し

え背く意思があるならば、軍兵を差し向けて、誅伐いたされるはずである。参戦し

違背の義有らば、 軍兵を差し向けて 誅伐を加へらるべきなり。 参著

ようとするか否か、すぐにご返答いたせよ」と仰られた。国司は青ざめて、思い悩

有るべきや否や、 速やかに勅答申されよ」

む様子に見えたのを、執事入道がきっと目配せをしたところ、国司は笏を持ち直し、「ご到着のことは先だって承知申し上げるところだが、少しばかり体調を崩すことになりまして、遅参することになっております。今この厳命を被る上は、一族たちに知らせて、時を待たずに馳せ参上するつもりでございます」と震えながら申し上げられたところ、「決してぞんざいなことがあってはならない」と荒々しく肘を張り出し、目を怒らせたようにして、すぐに使いは帰った。

その後国司は執事入道を呼んで、「このことをどのように考えるか」と仰ると、入道が申し上げたことは、「もう敵は国中に押し入り、民たちは皆彼の勢力に恐

既に敵、国中に乱入し、 国人皆彼が権勢に恐れ

れ、（仲間に入るため）走り加わっている有り様で、当家はとんでもない無勢であ

馳せ加わるの、 当家以ての外無勢に候へば、

りますので、どのように勇ましく思っても、とても敵い難いと思われま

如何に猛く思ふ共、 中々叶い難く覚え候。 さればとて

からと言って、道理に反すように（敵に）与するならば、同時に不義の嘲りを身に

無道に与せば、 共に不義の嘲りを得べし。

受けるだろう。進退のことで取り乱しておりますので、少しの間北国の方へ退陣し

進退度を失って候へば、 暫く北国方へ御開き有って、

て、状況の変化をご覧になられるべきだろうか」と申し上げたところ、「それなら

時の変化を御覧ぜらるべうもや」

ば敵な道を塞がない前に」と言って、持ち物も持ちきれず、その夜のうちに逃げて行かれた。

注釈

※壺・楚の項羽が秦を攻め、潼関に入った事例……潼関は中国陝西省にあった関所。楚の項羽は秦を攻略しながら函谷関という地に到着する。函谷関は河南省にあった関所だが、潼関を含め広い範囲を「函谷関」と称された。参考文献:田中謙二・一海知義『史記』中 朝日新聞社

※貳・官符……太政官から下される公文書。

※参・腹巻き……腹に巻き背中で合わせるようにした軽微な鎧。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2022/1/29

海熊童子